



上林曉全集十三

筑摩書房

上林曉全集 十三

昭和四十二年三月二十九日第一刷發行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内 靜雄

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京(291)七六五一(代表)

振替東京四一二三

印刷 大日本法令印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi

上林曉全集第十三卷目次

昭和三年

地下鐵道見參記……………三

昭和七年

場末の食堂にて……………四

百舌鳥……………六

昭和八年

ブランドン氏の記念品……………九

昭和九年

母の手紙・母への手紙……………二三

思案の辻……………二四

母校……………二五

昭和十年

田園小品……………一八

狐……………一八

山火事……………一九

村の散歩者……………二二

田園ノオト……………二三

椎の實拾ひ……………二七

鐵橋の町……………三〇

昭和十一年

田園歳末記……………三三

區長改選の日……………三三

財産整理……………三四

郷愁……………三五

土佐風景……………三六

故郷抄……………三九

講……………三九

先祖祭……………四〇

建碑式……………四一

熊本市上林町……………四一

靴を大切にしろ……………四三

古木さん……………四四

鯉……………四七

蘆花……………五〇

イネコ……………五三

昭和十二年

ゲエテ家の養蠶……………五四

天沼雜記……………五七

耶馬溪の墓……………六〇

昭和十三年

學校參觀……………六三

酒匂郁也君を憶ふ……………六七

古本屋……………六八

金桁鑛泉と奴留湯……………七三

金桁鑛泉……………七三

奴留湯……………七四

法隆寺の敬禮……………七五

子供の手紙……………七七

花……………七七

署名帖……………七九

昭和十四年

嘉村磯多の葉書……………八三

故郷風物誌……………八四

鯢の臍……………八四

郁子……………八五

防風と海髪	六六	横光利一	二三
かけた茶碗について	六七	川端康成	二五
支那料理店ビノチオにて	六〇	林房雄	二六
N 大學幼稚園	六三	昭和十五年	
鶉の卵	六六	心境の映畫觀	一三〇
百日咳	六八	野に出て	一三七
秋祭	九八	私の小説勉強	一三七
ゆかりの家	一〇一	印象記	一四二
迎春	一〇二	加能作次郎	一四二
現代作家印象記	一〇六	谷崎精二	一四三
幸田露伴	一〇六	近松秋江	一四四
長谷川如是閑	一〇七	初夏郷愁	一四五
谷崎潤一郎と直木三十五	一一〇	我が交遊記	一四八
山のホテルの人々	一二三	苦難の日	一五〇
宇野浩二	一二七	夏籠り	一五一
室生犀星	一二〇		

大町桂月と田中貢太郎	一五五
命	一五六
舊友消息	一五六
正倉院御物拜觀	一六〇

昭和十六年

高根の花	一六三
残念	一六五
古机の記	一六六
一匹の蠶	一六七
文學の故郷	一六八
風呂桶の話	一七一
小庭記	一七三
作家生活瑣談	一七五
小袖貝の話	一七八
大正の本	一八一

正宗白鳥會見記	一八四
シネマ・パレスにて	一八九
昭和十七年	
舊正月	一九三

一月二十九日の記	一九六
標本室	一九八
丸山晚霞遺作展	二〇〇
夏	二〇二
武藏野文章	二〇四
朝涼	二二二
藤村近影	二三三
秋日抄	二三五
郷土紹介	二三〇

昭和十八年

田畑修一郎追悼	三四
好きな言葉	三四
島崎藤村を悼む	三五
小庭記	三六
乗物經歷	三八

昭和十九年

野草	三三
小庭記	三三
高麗村	三五
田舎の地力	三七

昭和二十年

醜男考	三九
小庭記	四〇

昭和二十一年

節分	四三
議員	四四
煙草修行	四六
強盜恐怖	四八
舊友	四九
蓑蟲	五一
正月以來	五三
執筆餘話	五五
口述筆記	五五
採訪	五六
仕事の祕密	五七
煙草雜記	五八
楊梅と黃平	六〇
一 楊梅	六〇
二 黃平	六一

鷗外の墓	三三
齋藤謙太郎君の思ひ出	三五
露店風景	三七
甲州御坂峠	三八
身邊二題	三七
ペン・ネーム	三七
自分の本	三四
動物園にて	三七
文房品	三七
夏日閑居	三八
歳時記	三八
松山の思ひ出	三六
土佐拾遺	三八
多磨墓地	三九
隣人への感謝	三九
小庭記	三九

癖	二九
青柳優告別式	三三
昭和二十二年	
露命	三〇六
猫	三〇八
自畫像	三二
改造社時代	三三
能見物	三三
宇野さんを囲む會	三三
三寶寺池清遊	三五
海村行	三六
鳥打ち	三六
坊さん	三六
畫家の母	三六
幸徳秋水の墓	三五

昭和二十三年

回想のブランデン先生……………三七

井伏大人……………三四一

菊池寛の死……………三四二

春先二題……………三四三

空つ風……………三四三

朝湯……………三四四

編輯者今昔……………三四五

豊世さん……………三五一

小庭記……………三五三

仕事部屋……………三五六

昭和二十四年

某月某日……………三五八

生れて初めての経験……………三五八

木曾馬籠……………三六三

亡き伴侶……………三六七

わが子の教育……………三六七

目白……………三六八

税金……………三七〇

田舎土産……………三七一

納經……………三七一

孫の手……………三七二

鶏……………三七三

舊友……………三七四

菩提樹……………三七五

伊藤整……………三七六

盆踊……………三七七

京都の思ひ出……………三七八

來向ふ秋……………三八三

孤兒……………三八四

私の好敵手……………三六

目なし達磨……………三七

作家の心……………三八

昭和二十五年

灰ざら……………三九〇

讀者からの手紙……………三九一

Gペン……………三九三

未完の手紙……………三九四

「中央公論」と「改造」……………三九四

新参記者の日記……………三九五

早春雑筆……………四〇三

福壽草……………四〇三

墓……………四〇三

梅……………四〇四

なつかしき本……………四〇四

一酒徒……………四〇六

梅雨……………四〇七

きりぎりす……………四〇八

庭の花……………四一〇

歳末記……………四一二

暮の新宿……………四一三

昭和二十六年

律氣な井伏鱒二……………四一四

伊豆での正月……………四一八

日常茶飯……………四一九

仕事……………四一九

洗濯……………四一九

炊事……………四二〇

晩酌……………四二〇

息子の便り……………四二〇

鼠捕り	四二
女中お目見得	四二
春	四三
作家會合風景	四三
1 猪を食ふ會	四三
2 河豚を食ふ會	四四
3 阿佐ヶ谷會	四五
4 泡盛を飲む會	四六
むすこ上京	四六
國稅局にて	四六
擬寶珠庵雜筆	四九
鮭の骨	四九
花園を荒らすもの	五〇
夏爐	五二
花火	五二
山氣	五三

文壇酒友錄	四五
文學の二十年	四九
師走の心	四七
昭和二十七年	
南の正月	四八
ふるさとの肴	五三
書誌	五五

隨 筆

昭和三年

地下鐵道見參記

たとへば土中に埋めた鐵管の中にゐるのが地下鐵道で、大震災の時これがあつたなら、死亡者の何分の一かは完全に助つてゐたさうだ。——さう安心しながら、簡素な舞臺裝置に似たあどけない「うへの」驛入口を降りて行く。船腹のやうに板を張つたトンネルに晝の電燈が並んでゐる。地下二丈四尺の溫氣がむつと来る。

十錢白銅を入れると、マグネチックな力がはたらいて、ターンスタイルが一回轉する。これは、うちから押せばいくらでも廻轉するといふ代物だ。面白がつて押し廻しながら皆が通過する。面倒臭い切符なしですむのは有難い。回数券を持つ人の爲めにはパッシメーターがある。

黄に塗りつぶしたカアだ。間接照明の光りが車内に柔い。珍しまぎれに乗り込んだ大勢の乗客は、車の内外を見廻してゐる。子供は口にくはへた指の間から「地下鐵」を繰り返へしてゐる。一九二八年の三歳の子供は、四十二歳の母親と同じ最初の「地下鐵」の經驗をしてゐるのだ。

毎日汲み出すといふレエルの間の溝に潑んだ水を眺めて

ゐると、向うからカアがやつて來た。それが停ると、こちらのカアが警笛を鳴らして、無愛想なセメントの壁の中を走り出した。墜道の天井の灯がこぼれるやうに車窓の上部から掠めて過ぎる。

驛々には藥やキネマや醬油などの廣告が、生々しいセメントの匂ひにすさんだ薄闇の地下道に色彩的な享樂を與へてゐる。商業主義の廣告でさへ、ここだけではたつた一つの藝術品だ。「いなりちやう」「たはらまち」「あさくさ」と突進して行く先き先きで、それらは快い色調を發散する。

我々の頭上の大地では、軍隊が行進してゐるかも知れない。積み過ぎた貨物自動車が撓つて走つてゐるかも知れない。どんな素晴らしい出來事がいつ起るかも知れない。けれども、そんなことには白痴の如く無關心な世界がこゝにある。全線一哩三分、ゆつくり走つて五分時の間は、少くとも我々は現實世界から遊離して、ソロモンの壺にでも封じ込まれてゐるやうな妖精じみた感觸を全身に感じながら、はるかに知らぬ世界を旅行してゐるのだ。

換氣裝置を二つ數へたら、もう「あさくさ」だ。自動式ドアは完全に停電しなくちや開いて呉れない。早や着いたのかと思ふ張り合ひ抜けのした氣持で、朱壁の間の階段を昇る。そこでもターンスタイルが玩具のやうに廻轉してゐる。もう一つ階段を昇ると、蒼空がくつきりと額入りに見える。新聞賣りの鈴が聞える。そして、たうとう汚れた市

内電車が一腹仔の乗客を満載して走つてゐるのが見えた。吾妻橋と雷門の間だ。

これは盛り場の浅草と、杖を曳く人の群る上野間の遊覧電車だ。貨物運搬の經濟的活動はないが、一日三萬の乗客が吞吐されてゐる。地上の文明に西歐を追つてゐた日本が、これから地下の文明を追はうといふのだ。これをしも最も新しい交通機關だと云へば西洋人は笑ふかも知れないが、仕方がない、日本では一番新しいんだから……。萬世橋までの第二期工事が品川まで通じ、新橋から池上の方まで通じる曉には、我々の生活は地下にまで擴大される。そして幾十萬年の後、地上の生活に疲れた人間が、この地下鐵道の廢墟に蜘蛛のやうに巢食つてゐるところを想像するのも面白い。更に隅田川の底を潜つて江東を渡る頃には、我々はあの大川の美しい濁り水と汚泥のずつとずつと下の方で、ふとした拍子にギイギイといふ槽の音を錯覺的に聞くやうになるであらう。

(二月六日)

昭和七年

場末の食堂にて

もう十一時を過ぎてゐたけれど、雨が歇んだらしいので、僕はぬかるみを蹈んで外へ出た。僕は古びたトンビをひつけてゐた。このトンビは、九十歳で死んだ親戚の老人のかたみ分けに貰つたもので、僕はこれを芽出たいかたみと思つてゐる。三十歳の男が九十歳の老人の着てゐたトンビを着てゐるのは鳥渡變だが、僕はこれを着てゐると長生きをするやうに思へる。不老長壽の外套を着て歩いてゐるやうな氣がして心が暖い。

このトンビをひつけて、僕は僕の住んでゐる場末の町を歩くのだ。

このあたりには、ネオン・サインのかどやくカフェーはもちろん、喫茶店一つない。だから僕は、支那蕎麥屋、蕎麥屋、鮎屋、おでん屋、そんなところの暖簾をくぐつて、貧しい夕食を食べたり、夜更けての空腹を充たさせる。

「不景氣はなか／＼深いですぜ」と鮎屋のおやぢは言ふ。

「このあたりの繁昌しないのは、大きな屋敷が表通りを占領してるからですよ」と、おでん屋のおやぢは言ふ。そんな